
夏色!!

雨月 照瑟

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏色！！

【Nコード】

N 8 1 1 2 E

【作者名】

雨月 照琵琶

【あらすじ】

「夏休みの間留守をよろしくね」母親のその一言で夏休みは波乱の予感…。今里家の3兄弟と夏休みをひとつ屋根の下で過ごすことになった奥津莉真。複雑な三角関係ならぬ四角関係の結末は？

第1話：夏休み

7月中旬の満員電車の中、奥津莉真^{りま}は涙目で必死に声を殺していた。
どうしよ…。声だしたいけど…。誰か助けて！

必死にこらえていると男の手がスカートの中へと侵入してきた。

「――！」

髪の毛がつきそうな肩を小さくふるわせる。

あと…二駅もあるの……

そう、考えている莉真を抱き寄せる手があった。

「おい、おっさん。俺の後輩に何してんだよ」

莉真はぱつと顔を見上げて目を見開いた。

その声の先には同じ高校の制服を着た、ショートヘアといった感じの髪の少年が立っていた。

「今里先輩！？」

「てめえも助けを呼べ――！」

となり声にびくつと肩を震わせ抱き寄せられた体から離れた。

「あ…ありがとうございます」

電車を降りてからの道のり隣にはぴったりと先ほどの先輩…今里碧^{みどり}が歩いている。

「あの…」

「何？」

「少し離れてくれませんか？」

莉真はうつむきぎみに静かに呟いた。

莉真の訴えに碧は小さく舌打ちをしてすたすたと歩いて行った。
その背中を見て大きくため息をつく。

幼馴染だからって…親じゃあるまいし、少しうつとしい…

駅から学校は近く数分歩けばすぐ着くというところにある。

莉真は教室に着くと机に突っ伏した。

莉真の様子を見た友人、秋元萌が話しかけてきた。

「どーした？また、今里先輩となにかあった？」

顔をあげたその先には短髪の活発そうな少女が腰に手を当てて立っている。

「そーなの。せつかく明日から高校入ってから初めての夏休みなのに…」

また顔をうつむかせ頭を抱える。

「最悪だぁ」

「あの人もしつこいねー。だけど、校内で一番もててるんだよね…。あんなのどこがいいんだか」

「萌ちゃん…。その発言は全校の女子を敵にまわしちゃうよ？」

顔をあげてそう言っていると萌は莉真の頭をくしゃっとなでる。

「んー？あんたが見方でいてくれればそれで十分だよ」

「萌ちゃん…」

莉真は困ったようにクスツと笑う。

「あんたは笑ってる顔のほうが可愛いよ」

萌は腕を組み考え込むように唸った。

「まあ…今里先輩の気持ちもわからなくはないけど…」

その言葉に莉真は首をかしげて萌の顔を覗き込む。

「なんで？」

萌はあきれたという顔をして溜息をついた。

「だって…ってしょうーがないか…。あんた鈍感ちゃんだもんねー」

「それとこれとは関係ないでしょ！」

鈍感と言われた莉真はむっと頬を膨らます。

その顔をみて萌はくすくす苦笑する。

「関係あんの！結構あんた男子からモテてるんだよ！？そりゃー先輩も気が気じゃないよね」

莉真は目を見開いたが、すぐに平然とした表情に戻る。

「へー」

「うわっ、何そのいかにも興味ないです的な返事は！」

「だって…、あんまり男性に関して嫌な記憶しかないから」

「まあねえ…。でも、悪い奴ばつかじゃないとあたしは思ってるけど」

莉真は視線をそらすように目を伏せる。

「そんなこと…わかってるけど…」

萌が口を開きかけたと同時にチャイムが鳴り担任が教室へと入ってきた。

「やったあ！終わった終わったあ」

莉真は朝のテンションとは違いウキウキとした様子で鞆に荷物を入れている。

朝のテンションはなんだったのだろうか…

萌やクラスメイトは口をぽかんと開けて莉真を見ている。

視線に気づいた莉真は首をかしげる。

「あれ？みんな、ポカーンとしてどうしたの？」

にこにことした表情でクラスメイトに問いかける。

男女問わず人気のある彼女のその笑顔にときめいたクラスメイトは何人いたことか。

やっぱ、かわいいよねー。妹にほしいわあ

告白したいけど、今里先輩が怖いし…

「「なんでもないよー」」

「ふうん…。変なの」

自宅にたどり着いた莉真は元気よく玄関をあける。

「たっだいまー」

そして足元を見ると見知らぬ靴が数足置いてあり、リビングからは賑やかな声がする。

隣のおばさんたちでも来てんのかなあ…

リビングの扉を開けると母・友子が笑顔で迎えた。

「あらっ、莉真おかえりー」

「ずいぶんにぎやかだね。誰か来てんの？」

「ええ、前にほら言つてたでしょ？」

「ああ、一ヶ月間くらい海外の別荘で過ごすっていう？」

「ここにこしながら母はうなづいた。」

「そうそれ、百合子さんたちと行くことになってるからね。今夜から百合子さんちの息子さんたちと一緒に過ごすのよ」

莉真はあつけにとられ鞆を落とした。

その鞆を友子はあらあらと言いながら拾った。

「えー！！一緒に行かないとは言ったけどそれは聞いてないよ！？」

友子は頬に手を当てうふつとほほ笑んだ。

「だあって、言っていないもの。私たちは今日これから出発しちゃうからあとよろしくね」

納得のいかない顔で莉真はうなづいた。

「うん…」

「翠君と清也君はすぐ帰ってくると思うから」

リビングのへと入ると父と今里家の夫婦が楽しそうに話していた。

父・久雄が莉真に気づき、そのあとで碧の両親・百合子、文次も気づく。

「おかえり、莉真。その様子だとお母さんからはもう聞いたみたいだね」

「留守の間大変だろうけどバカ息子たちをよろしく頼むわ」

「はあ…」

友子は時計を見て大変とつぶやく。

「そろそろ、タクシーが来る時間だね。じゃあ、あとよろしくね」

「うん。いろいろと納得はいかないけど…気をつけて」

親たちが出て行ったりリビングで一人ソファに寝そべる。

「碧はともかく…。清也さんと翠さんは久しぶりに会うのかあ」
急に睡魔に襲われ、そのまま目をつぶってしまった。

『莉真ーっ。大丈夫か！？』

莉真は熱いアスファルトの上でうずくまって泣いていた。

『あゝあ。こんなに血が出る…。ほら、早く洗いに行こう？』

幼い少年の手が同様に幼い莉真のを引いた。

『ふえゝん。いたいよお、碧おにいちやあん』

『ゝゝゝ。ほらっ、いたいのいたいのとんでいけー。もう、大丈夫！』

泣きじゃくる莉真の頭をなでながら碧は呪文を唱えた。

『ほんとお？』

嗚咽をあげながら問いかける莉真に優しく笑いかける。

『うん！俺、うそつかないだろ！？』

小さい頃は優しくかったのに…。いつからあんなになちゃったんだっけ……

重たい瞼をあげると、長髪の顔立ちの整った男性が顔を覗き込んでいた。

「あ、目さめた？だめだよ、女の子がこんな無防備で寝てたら…」
寝起きでぼーっとしてる頭で莉真は一生懸命考える。

この人誰だ？

じいっと顔を凝視する莉真に男性は苦笑して、頭をかいた。

「まあ、しょうがないかあ…。何年も会ってないからね。俺、清也だよ、覚えてる？」

やっと莉真の思考回路がつかがる…。と同時に莉真は顔を真っ赤にさせた。

「お、覚えてますよ！お久しぶりです」

忘れるはずがないです…。ずっと…ずっと見てきたんです

『ただいまー』

いつも声が聞けるのはこの時…清也さんが大学から帰ってくるときだけ…

いつも2階の自分の部屋の窓から清也さんの背中を眺めてる…

話したいな…。清也さんは私のこと覚えててくれてるのかな？

小さい頃の“憧れ”はいつしか“好き”という気持ちになっていた。でも…、いつも碧先輩の邪魔で会話なんてすることはできなかった…

「どうかした？顔真つ赤だよ？」

「ほえ？な、なんでもないです」

清也はにこりと笑って莉真の髪にふれる。

そのしぐさに莉真はどきつとした。

「きれいになって…見違いちゃったよ」

「あつあの…。っ」

突然莉真はビクンと肩を震わす。

清也の指が髪から肩へ…そして頬へとなぞった。

二人っきりの音は蝉の鳴き声だけの静かなリビングで二人は見つめあった。

はわわ…。心臓の音聞こえちゃうよ！！はずかしいんですけどー

「莉・真…」

「な、なんです？」

「なーんて、驚かせてごめんね。ほら、スカートがしわだらけになっちゃうから着替えておいで」

清也は意地の悪い笑顔を浮かべて莉真をソファから立たせた。

そして、急に顔を近づけて耳元でささやく。

「なんなら、俺が着替えさせてあげよつか？」

「もうっ、からかわないください！自分で着替えられます！」

莉真は少しむすつとしながら自分の部屋へ向かった。

その後姿を見て清也はクスツと笑った。

「かわいいなー。碧が会わせてくれなかった理由もわかるな」

碧に負けないよう本気でいかなとなあ…

莉真は一人部屋の中で着替え終わったあとボスボスと枕を叩いていた。

恥ずかしいー。ひとりでドキドキしてバツカみたい…

「…でも、かつこいいなあ…」

動悸を抑えてリビングへと入ると碧と翠も来ていた。

短髪の髪が腕を広げて莉真を迎えたが、莉真は苦笑してスル―した。

「あ、莉真ちゃん。久しぶりー。って…ちょっと冷たい」

「お久しぶりです。あ、お部屋のほうは一人一部屋で用意しておきました」

「サンキュー、莉真」

近づいてきた碧から莉真はさつと後ずさる。

そうだった！すっかり、忘れてた。このひともいるんだった！！

さあ、なんだかひと波乱がありそうな予感…莉真の夏休みはどうなるんでしょうか？

第1話：夏休み（後書き）

夏休みのお話しということで連載ですが短くやらせていただきます。

第2話：兄妹

莉真は背後からの気配にビクツとなり、思わず持っていた包丁を向けてしまった。

「いやあ！」

振り向いたその先に立っているのは最も苦手としている、幼馴染の碧みどりだった。

「てめえ……。何様のつもりだ!？」

怒鳴られた莉真は肩を震わして、うつむいた。

「料理中なんですから、邪魔しないでください」

苦手意識はだめだよね……。わかつてるけど、わかつてるけど！

莉真はまな板の上に置いてある野菜を切り始める。

そうすると今度は横から翠すいがのぞいてきた。

「莉真ちゃんどうしたの？ 碧がセクハラでもした？」

「いえ、いきなり背後に立たれてびっくりしただけです」

ふうんと言いながら翠は用意されてある材料を眺めた。

「今夜はコロツケかな？」

「そうですねー。確か皆さん好きでしたよね」

翠の問いかけに莉真はにこにこしながら答えた。

「よく覚えてるねー。なんか手伝えることある？」

「あ、じゃあこっちのじゃがいもの皮むきお願いしてもいいですか？」

「まっかせてー」

二人の様子をソファアから碧が恨めしそうに眺めていた。

その碧の様子を清也は見て、クスツと笑って新聞から顔をあげる。

「そんなにうらやましい？」

「兄貴にはかんけーねえよ」

清也は新聞を畳んで、眼鏡を外した。

「ふーん」

「なんだよ……」

「おまえはさ、莉真のことが好きなの？」

突然の清也の質問に碧は顔を真っ赤にしてソファから落っこちそうになる。

「な、何急に……」

「そういう反応するってことは……」

物音に振り向いた莉真と目が合い、碧は視線をそらす。

あわててソファに座り、平然を装う。

「だったら、なんだよ……」

「いや、なんでもないよ」

清也は莉真の入れたコーヒーを口にした。

「あの二人は仲悪いんですか？」

莉真はじゃがいもの皮をむきながら翠に問いかける。

「なんで？」

「雰囲気冷たい……？」

翠はにこつと少年のような笑顔を浮かべてじゃがいものを置き、莉真の頭をなでた。

「仲良いから、心配はいらないよ」

「なら、いいんですけど」

ふうとため息をつきながら莉真は二人をちらつと見た。

「溜息つくと幸せ飛んで行っちゃうよ？」

翠の言葉に莉真はクスツと笑った。

「莉真、これおいしいよ！おばさんが自慢してたのもわかるなあ」

清也はコロッケを口にしながら莉真を褒める。

莉真は首をかしげる。

「自慢？」

「ああ、うちにおふくろと話に来る度に莉真の料理はうまいって」

「そうだねー、いつも言ってるよ。だから、今回のお泊まりは楽しみにしてたんだよ」

清也と翠に褒められて莉真は頬を薄紅色に染めた。

「ありがとうございます」

「スープもサラダもおいしいねえ。あ、そうだ」

翠がぱつと顔をあげて莉真を見る。

「どうしました？」

「明日、塾なんだー。弁当お願いしてもいいかな？」

「構いませんよ。何時までに作ればいいですか？」

「ええっと、8時ぐらいまでに」

莉真はうなずきながらにこっとして、腕をまくって見せた。

「はい。腕によりをかけてつくりますね」

「楽しみだなあ」

塾かあと清也がつぶやく。

「翠はどこ受けるの？」

「僕？兄さんと同じとこ受けようかと思って」

「そうか…。なんなら、勉強教えようか？」

「わかんないとこあつたらお願いします」

二人のやり取りを見る莉真に碧が気づいた。

「どうした？」

「え？いや、兄弟っていいなあと思って…」

「そっか、お前一人っ子だもんな」

「この夏休みはお兄ちゃんが三人もいるみたいで楽しそうです」

ほほ笑んだ莉真に碧はどきつとした。

現在翠は莉真や碧とは違う高校に通っており、三年生で受験生だ。今里家の三人兄弟はみんな年子である。

その日の夜、莉真は自室で幼いころの写真を眺めていた。

「歳月ってすごいなあ…。みんな大きくなったんだ」

クスッと笑うと扉をたたく音がした。

「はい？」

扉があいて清也が顔をのぞかせる。

「バスタオル貸して」

「あ、今出しますね」

椅子から立ち上がって箆笥へと向かうと後ろから清也が抱きしめてきた。

莉真は体をこわばらせてそっと清也の腕にふれる。

清也は抱きしめる腕に力を込める。

「せい…や…さん？」

「碧なんかにわたさない。ずっと、君のこと想っていたんだよ…。好きなんだよ」

扉の隙間から誰かがその様子を見ていたがすぐに立ち去った。

「清也…」

莉真が口を開こうとするのを清也は口をふさいで止める。

「返事は今すぐじゃなくてもいいんだ…。ただ、夏休みの最後のほうには聞かせてね」

そついうと莉真の手からタオルケットを持って部屋を出た。

残された莉真はその場に力なく座り込んだ。

清也さんが……私を？

過ぎゆく夏

清也さんが私のことを…

少し開けた窓から入ってきた風が莉真の髪を乱す。

莉真は胸がちくんと痛むのを感じる。

うれしいはずなのに…

呆然と座っていると碧が開いている扉から顔を覗き込む。

「莉真？」

びくつとなつて振り向くと首をかしげた碧が突っ立っていた。

碧は莉真に近寄り目の前にしゃがんだ。

「ぼーっとしてどうした…？あ、ぼうつとしてるのはいつもか」

碧の言葉を聞いて莉真はむっとして碧の頭を小突いた

「碧さんひどい！！碧さんだけには言われたくない！！」

「おーよく言うわ…。」

莉真はちよつと碧を見て苦笑する、碧もつられて笑った。

碧はくしゃつと莉真の頭をなでる。

「あんな深刻そうな顔してるよりもこっちのほうがずっといいぞ」

「碧さんだつていつつも深刻そうなおしてるじゃない」

「まだ言うか…」

「りーまちゃん、碧知らない？…ってここにいたんだ」

今度は翠が顔をのぞかせてきた。

「翠、なんか用？」

「碧ー、お兄さんでしょ？何回も言わせるな」

そう言うのにこにこしながら碧の頬をつかみひっぱる。

「ふいはひえんれひはー。」「すいませんでしたー」

その二人の様子を見て莉真は茫然とする。

これが家の顔というものかあ

莉真ははっとして翠に話しかける。

「碧さんに何の用ですか？」

翠はぱつと碧の頬から手を離して莉真を見る。

碧は横で頬をさすっている。

「ばっかやろう。思いっきりひっぱりやがって」

「ん？何か言った？」

にこつとしながら碧のほうを向く。

「なんでもございません…」

「あ、そうそう。なんか携帯なつてたよ？それを言いに来ただけ」

「それだけかい」

碧がさつて行くと莉真はくすくすと笑う。

「ほんとに仲良いんですね…」

「でしょ？それよりも…ごめんね。兄さんの告白聞いちゃった…」

突然うなだれた翠に莉真はびっくりする。

「はえ？ああ…別に私はなんとも思っていないですけど」

「あ、そうなの？いやあ、立ち聞きするつもりはなかったんだけどね」

翠は苦笑いをして頭をかいた。

莉真はため息をついて目を伏せる。

「私はどうしたらいいんでしょう…」

その言葉を聞いた、翠は一瞬目を見開く。

「僕は君じゃないからね…」

翠の言葉に莉真は顔をあげる。

「ただ…君の決定次第で兄弟仲が壊れるとは限らないから、大丈夫」

「翠さん…」

翠はにこつと笑って莉真の手をそつと握る。

「僕でよければいつでも相談に乗るから。さ、兄さんが出たらお風呂呂入っちゃいなさい」

莉真もつられてほほ笑む。

「翠さん…ありがとう」

翌日…

「莉真ちゃんっ、おはよー」

リビングへ最初に顔を出したのは翠だった。

莉真は朝ごはんを用意する手を止めてほほ笑んだ。

「おはようございます。お弁当用意しておきましたから」と言って台に置いてある弁当を示した。

「ありがとー」

「す…兄さんは朝からテンション高いなあ」

「おはようございます」

にこつと笑った莉真に碧も笑いかける。

「おう。あ、今日の午前中は俺生徒会でいないから」

「じゃあ、今日は莉真と二人きりだな」

碧の後ろから顔を出した清也と目が合い、莉真はとたんにそらした。翠は二人を見比べて、フオローするように話す。

「おはよう、兄さん。莉真ちゃんは兄さんにやましいことでもあるのかな？」

「ないですよ！もうっ。ほら食べないと二人と遅れちゃいますよ」

3人がドタバタやっているそばで清也はじつと莉真を見つめる。

清也の様子を碧が見て眉をひそめた。

「じゃ、いつてらっしゃい」

莉真が玄関先で手を振ると二人は振り返った。

「行ってくるね」

「昼には帰るから」

沈黙を先に破ったのは碧だった。

「なあ…」

「何？」

「……なんでもない」

翠は眉根を寄せて、碧を小突く。

「気になるじゃんか」

「いーの」

「さいですか」

翠は諦めたように溜息をつく。
碧もつられて溜息をついた。

一方家に残された莉真は…

行ってしまった…。どうしよう二人きりだよう気まずいよ…

玄関で一人身もだえていると背後から清也が近寄る。

清也の気配に気づくと、いてもたってもいられず台所へ戻り食事の片づけをはじめた。

「莉真…。俺なんか手伝える？」

一瞬手を止めたがすぐに再開した。

「いえ…。清也さんは休んでいてください」

長い沈黙が二人の間に流れる。

リビングに流れるのは風と蝉の鳴き声、食器を洗う水の音だけだった。

莉真は食器の片付けを終えると次は洗濯物へととりかかり忙しそうにせわしなく動く。

清也はただその様子をじっと見つめていた。

家事がひと段落すると莉真は自分の部屋に入って扉を後ろ手に閉める。

「はぁ…。宿題やろう…」

莉真は椅子に座って化学のプリントを取り出してやり始めた。

数時間後…プリントが半分終わるくらいまでに進んだ頃に玄関のチャイムの音がした。

携帯の時計を見ると11時半になっていた。

碧さんかな

「はい」

玄関を開けると案の定碧が汗だくになって帰ってきていた。

「おかえりなさい」

「ただいま…。シャワー浴びてもいい？」

「どうぞ」

莉真がにこつと笑って上げると碧はネクタイをはずしながらあちいとつぶやく。

「じゃあ、私お昼の支度してますから」

「おう。タオル借りるな」

莉真はほつと胸をなでおろし冷蔵庫を開ける。

あちゃー。買い物しなきゃだめだなあ。後で行ってこよう

「まだ7月なのに暑いなー」

翠はタオルで汗をぬぐいながら一息ついた。

「あれ…？」

人通りのほうへと目を向けた。

「うっ。重たい…」

莉真がふらふらしていると急に手元が軽くなったのを感じた。

「危なっかしいなー。兄さんとかは一緒じゃないんだ」

声の方へと向くと荷物を持った翠が苦笑して立っている。

「あ、翠さん。塾終わっただんですか？」

「うん、今帰り。そっちの荷物も持つからこれ持つて」

莉真はありがとうございますといいながら翠から鞆を受け取る。

「なんで、わかったんですか？」

「えー？よたよたペンギンみたいに歩いてる子を見かけてね…。もしやと思ったら莉真ちゃんだったんだ」

ペンギンとつぶやいて眉をひそめる莉真を見て翠はほほ笑む。

「あ、弁当美味しかったよ。ありがとう。冷凍食品を全く使ってないんだね」

「私の家に冷凍食品は置いてないですから」

「ふうん。晩御飯の買い物かな？」

がさつと袋の中身を見て莉真に問いかける。

「はい…。冷蔵庫の中空っぽだったんで。……翠さんがいてくれて

助かりました」

莉真はにっこりと笑って翠を見る。

翠は莉真に気づかれないように小さくため息をついた。

似た者兄弟ってこういうこと言うんだよね…

翌日、翠は塾の教室で同級生にどつかれた。

「翠ー。昨日一緒に歩いてた子彼女ー??」

どつかれた勢いで机に突っ伏した翠は同級生の胸倉をつかむ。

「おまえ何様のつもりだよ」

「いやー翠がキレたあああー!!」

溜息について手を離して座ると相手も目の前に座る。

「で?彼女なのか??」

「しつこいぞ健吾。彼女だったら苦勞してないって」

翠は鞆からテキストを取り出しながら答える。

「もしかして、弁当作ってくれた子?」

「うん」

「……好きなのか?」

健吾はドキドキしながら翠を見つめた。

「……………さあ……」

翠の生返事に眉をよせて、話題を変える。

「昨日持ってたの買物袋だろ?えらいなあ、しかもめっちゃかわいいし」

「あの子のおふくろさん家事苦手だから小さい頃からよくやってるよ」

翠はふつと苦笑して頬杖をつく。

「手ごわいライバルもいるしがんばんないとね」

「兄貴と弟?」

翠は片目を開けて健吾を見る。

「なんでわかったの?」

「何年お前の友人やってると思ってるんだよう!」

くすつと笑う。

「おまえにはかないませんなあ」

健吾はにかつと笑うと教室の時計を見上げる。

翠もつられて見上げた。

「おっと、授業始まっちゃうな。俺でなければいつでも相談に乗るぜ！」

はいはいと言いながら手を振った。

家には莉真一人だけだった。

「あれ？二人は？」

「あ、碧さんは部屋にいますけど…。清也さんはお昼のあとどっかに出かけちゃいました」

莉真はお茶菓子と麦茶を用意しながら答えた。

「碧さん呼んできてください。お茶にしましょう」

「りょーかいっ」

翠が扉を開けると碧はベットのの上に寝そべって本をよんでいた。

碧は本から翠へと視線を流す。

「なあ…、兄さん。清也兄さんって莉真のこと好きなのか？」

「なんで僕に聞くの…」

「いや、兄さんならなんか知ってると思って」

「鋭いね。僕は告白…」

そこまで言つと碧は勢いよく起き上がって翠につかみかかる。

「はあ！？」

「だから…」

翠はそつと碧の手を離した。

「莉真ちゃんは悩んでるみたいだけど…」

碧はほつとしたように座り込む、すると1階から莉真の呼ぶ声がした。

「翠さーん、碧さーん」

「ほら、呼んでるよ。行こう」

二人が階段を降りると莉真がリビングからこっちを覗いている。
翠がにこつと笑うと莉真もほほ笑んだ。

4 人の思惑が渦巻く中夏休みは過ぎようとしていった

第4話：本当の気持ち

夏休みものこりあとわずかとなった日に莉真は夕陽のあたる部屋で洗濯物を畳んでいる。

碧、翠、清也の3人は買い物に出かけていて家には莉真ひとりである。

「一人って静かだなあ……」

夏休みもあと少し……

ふと、夏休みの最初に清也から告白されたことを思い出す。

「どう……しょ……」

違う……。私の好きな人は清也さんじゃない、やっぱり憧れでしかないのかな

最後の一枚を畳み終わると一息ついて立ち上がった。

「今夜は3人が晩御飯作ってくれるって言うし。お茶菓子でも作って待ってようかな」

部屋を出て台所へ向い、お菓子作りを始める。

オーブンで焼いている暇な時間に莉真は洗濯物をそれぞれの部屋に持っていくことにした。

翠、碧の部屋へと順に置いて行ったところで3人がかえって来た声が1階からした。

「ただいまー」

「あれ？返事がないね。2階かな？」

翠が見上げると清也が階段へと足を向ける。

「おれが見てくる」

清也の部屋へ入り洗濯物を置いて整理したとき部屋の扉が閉まる音を聞いた。

莉真が振り向こうとしたその時誰かに後ろから抱き締められる。

「莉真……」

「清也さん……。離してください」

莉真の願いとは逆に清也は抱きしめる手に力を込めた。

「そろそろ、返事」

返事という単語を聞いた莉真は肩をビクンと震わす。

清也はそれを感じそのまま抱きかかえてベッドへと押し倒す。

「や…、離して。はな…んっ」

黙ったまま抵抗する莉真の唇を奪った。

「いやあっ」

莉真は清也を力いっぱい押して腕からのがれた。

清也は莉真が涙を流しているのに気づく。

「莉真！？」

莉真は清也から目をそらしばたばたと家を出て行ってしまった。

騒ぎを聞いた2人が階段を上ってきた。

「兄さん、莉真ちゃんは？」

清也が押し黙ったままなので翠はため息をついた。

「ちよつと、探してくるよ。碧は兄さんから話し聞き出しといて」

「ああ」

部屋を出ようとした翠の腕を清也がつかむ。

「おれが行く」

翠は振り返って腕をつかむ清也の手を離す。

「兄さんが行ったら逆効果でしょう。僕が行ってくる」

清也は舌打ちをしてそっぽを向いた。

「じゃあ、よろしく碧」

「おう、任せとけ」

翠は家を出るとまっすぐ近所の公園へと向かった。

そこは幼いころに4人でよく遊んだ場所。噴水があるきれいな公園だった。

莉真は小さい頃から何かあるとその噴水のところに座って泣いているのを翠は知っていた。

公園へ着くと案の定噴水のところで肩を震わせて泣いている莉真が見えた。

人がちかづく音がしてびくつとなつて振り向くと立っていたのが翠だった。それで莉真はほっと安心した。

「翠さん…」

「莉真ちゃんをよく何かあるとここにきてたね」

そう言いながら翠は莉真の隣へと座る。

「その度にいつも迎えに来てくれたのは翠さんでしたね」

笑顔を作ったがまたすぐに涙があふれてくる。

翠はそつと莉真を抱き寄せた。

一瞬体をこわばらせた莉真だったがすぐに水の胸へと顔を押し付ける。

そこで莉真はあることに気づいた。

「何があつたか教えてもらえるかな？」

翠は莉真の髪をやさしくすきながら問いかける。

「清也さんが…無理やりキスをして…」

「うん…。辛かった？」

「わかんない…。でも、ちつとも嬉しくないんです」

「うん」

そこではつと顔をあげる。

「気づいたんです。」

「何に？」

「私の好きな人は翠さんだつて」

翠は一瞬目を見開きギョツと莉真を抱きしめた。

「僕も好きだよ。莉真のこと…。守りたい」

「翠さん…。私気付いたんです。」

いつもそばにいてほしい時にいてくれたのは…いつも支えてくれていたのは…

翠さんだつて」

「莉真…」

2人は顔を見合せてゆっくりと目を閉じて唇を重ねた。

一方家では……

「おい、莉真に何したんだよ！」

碧は仁王立ちになって清也を見下ろす。

「おまえに言う必要はねえよ」

「はあ!？」

碧が何か言いかけた時部屋の扉があいた。

「碧、もういいよ」

「兄さん！？と莉真」

碧は莉真を見てほっとした。

翠は碧をどけて清也の前に立つ。

「兄さん、一発なぐつてもいい？」

「は？……いつてえ」

翠は間髪入れずに胸倉を掴んで清也を殴る。

清也は殴られた頬を抑えた。

「話しは聞いたよ…。力づくじゃ手に入らないってわかってるよね」

翠が説教してゐる後ろで碧は莉真にこそつと尋ねる。

「何されたの？」

「だいたい……わかるでしょ？」

碧は少し考え込んでひらめいた。

「キス……とか？」

「ご明答：」

言い合いをしている清也にぼそとだけ聞こえるように碧は言った。

「お前、そういう人間だったのか。さいてーだな」

「おまえに言われたかねーよ」

そこで莉真は気づいたように階段を下りて行った。

「莉真？」

碧は部屋から顔を出して呼んだ。

「クッキー焼いたの。お茶にしましょう?」

まだ言い争ってる2人に碧は莉真に言われことを言った。
階段を降りる途中、碧は翠に問いかける。

「なあ…。莉真ってさあ…兄さんのこと好きってか。付き合ってるのか？」

莉真の気持ちにうすうす気づいていた碧はズバツと聞いた。

「あ、気づいてたんだ。……………さつき、探しに行ったときにね」

「ふうん。まあ、俺には気がなかったってことだよな」

碧は頭の後ろで手を組む。

「でも、莉真泣かせたらただじゃ置かないからな」

「うん、わかってるよ」

そんなこんなで1か月の同居生活も終わり両親たちが帰ってきた。

「ただいま。莉真」。お土産いっぱいあるわよー」

「おかえり」

そのあとはあつという間に夏休みも終わってしまい。

その夏休みから半年以上たとうとしていた、3月中旬

「莉真」

昼休みに机に座って本を読んでいると萌が前の椅子へと座ってきた。
莉真はゆっくりと本から視線を上げる。

「どうしたの？」

「さつき碧から聞いたんだけど、翠先輩。合格したらしいよ」

碧は11月から萌と付き合っていた。

「へえ…」

視線を本へと戻す。

「あれ？驚かないの？」

再び顔をあげてほほ笑む。

「さつき、メールきたからね」

「よかったね」

「うん。合格より驚きなのは二人だよ…。あんなに嫌ってたのに…」

萌は苦笑して頭をかいた。

「よくよく考えればいい奴だったーみたいな感じですよ」

「まあ、幸せならそれでいいけどね」

外を見るとまだ寒い風の中に暖かな春の日差しが教室へと入る。
桜の木の先にはつぼみが膨らんでいた

第4話：本当の気持ち（後書き）

夏休み中には間に合いませんでした…。

あんまり題名となかみが関連してませんがそこは温かい目でみてやってください。

他の作品も見ただけなら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8112e/>

夏色!!

2010年10月11日08時09分発行